



池浦にあった福岡県農業経営伝習農場

『新修宗像市史』現代部会から

福岡県農業経営伝習農場とは

第二次世界大戦後、農業や農村の近代化・民主化をはかる目的で、近代的な農業経営を行う農業後継者を育てるための施設「福岡県農業経営伝習農場」が宗像市池浦にありました。農業経営伝習農場は、主に中学校卒業者を対象に1年間の全寮制で、実習中心の農業教育が行われ昭和52(1977)年に閉場しました。

農業経営伝習農場の誕生

池浦にあった農業経営伝習農場は、昭和10(1935)年に赤間の城山山麓(陵厳寺)に農士道場宗像塾として、発足したものが、第二次世界大戦後の昭和25(1950)年に農事講習所から農業経営伝習農場になり、昭和36(1961)年に赤間から池浦に移転したものです。

農業経営伝習農場移転

農業経営伝習農場の移転は、昭和

35(1960)年に池浦の12ヘクタール

の土地を購入して、始めました。その土地は、小高い雑木と松林の山と山の間にわずかに水田が開けた荒れ果てた原野で、相原開拓地に隣接したところでした。農場生達は、陵厳寺の旧農場の農作業の傍ら、新農場の現地測量のための伐採からブルドーザーでの敷地造成工事、立木伐採、田畑の造成、果樹園の深耕、飼料畑の土づくりを行いました。

施設・設備は近代的な所得の高い農業を目指すにふさわしいものとして設置され、農場の全体規模は1684アールで、果樹194アール(温州みかん・ぶどう)、畑700アール(野菜・飼料用作物・花等)、水田280アールで、その他の256アールの中に鉄筋の本館や寮、畜舎、農機具倉庫等がありました。

池浦の農業経営伝習農場は、昭和36年4月から利用を開始、移転完了は36年7月でした。

農業経営伝習農場の変遷

このころの伝習農場の教育は、農村

青少年クラブの中核者の育成をめざし、農業の生産性の高度化を目標に、プロジェクト活動を中心とした経営診断、経営設計により近代化農業を学びました。また全寮制により、明朗で健康、協調性が高く、一方で自律性に富んだ農民の育成を行いました。クラブは、稲作・果樹・そ菜・花き・畜産がありました。

男子だけだった農場生は、昭和27(1952)年に女子部が併設され、一期生16名の入場がありました。はじめは、女子部は通学での教育でしたが、のちには全寮制となりました。

農業の機械化を進めるため、昭和30年代後半から一般の農業者向けに大型機械研修が始まり、研修生のための宿泊施設として、「青年研修館」(鉄筋二階建50名収容)も設けられました。

昭和41年(1966)43年は、それまで80名前後だった農場生の応募者が急増して100名以上となり、この青年研修館を利用して、教育が行われました。

存続運動から講習所と共に

農業大学校へ

応募者が急増したのも、つかの間。戦後の食糧需給不足が解消され、昭和44(1969)年に、米の生産が過剰となつて生産調整が始まり、高校進学率も段々高まってきたため、昭和46(1971)年には農場生は男子24名・女子

3名の27名と大きく減少しました。

さらに昭和48(1973)年には男子のみ19名と減少しました。卒業生の会「城山会」を中心に伝習農場存続運動もありましたが、昭和52年3月の第42期18名の卒業生を最後に伝習農場は閉場しました。

その後、伝習農場は昭和55(1980)年に筑紫野市吉木に開校した福岡県農業者大学校の研修科へと引き継がれました。

(現代部会 山野尚子)



トラクター運転練習
(出典のキャプションのまま)



伝習農場全景

(写真出典：『一筋の道 四十一年のあゆみ』福岡県農業経営伝習農場、昭和51年)